

ポピュラーカルチャー研究小史 A Shoty History of Popular Culture Studies

生井英考
IKUI Eiko

1

「アメリカ文化はまことに魅力的である」——かつて本間長世氏は『アメリカ文化のヒーローたち』と題する列伝形式のアメリカ人物論・文化論の冒頭の一行を、いともほがらかにそう書き起こしたものだ。1991年のことである¹。

いま、これほど快活にアメリカのポピュラーカルチャーを称揚できるアメリカ研究者は、果たしてどれほどいるだろうか。

ちなみにこの本は1986年にNHK教育テレビ（当時）で約三か月間にわたって本間氏が講師を担当した「NHK市民大学」の「アメリカンヒーローの系譜」放送教材用テキストを原形にしたものだが、単なる加筆修正の域にとどまらない全面的な改稿で著者の博学ぶりが遺憾なく発揮されたこともあって、講義録というよりむしろ達意の文章家として名高い氏らしい洒脱で知的な批評的エッセイ集の趣きを見せている。またそれだけに巻頭を飾るあの明朗でてらいのない一言はなんとも印象的で、いささかならず隔日の感を余儀なくさせるのである。

むろんこの間20年余のうちにはポスト冷戦期の有為転変があり、「アメリカ帝国」をめぐる論争があり、「9.11」があり、アフガン・イラク戦争があり、しかもその多くが「アメリカ」なるものへのきわめて厳しい風当たりを世界中に巻き起こしたことを思えば、この種の感慨などいまさら時代錯誤なものを受け止めたほうがむしろ自然なのかもしれない。しかもこの過程でハリウッド映画界、ポピュラー音楽界、プロスポーツ界といったアメリカの主要な娯楽産業の多くがしばしば時局におもねる動きを見せたことをも考え合

わせるなら、話はなおさらだろう。

しかしそうだとすればなおのこと、つい20年前のポピュラーカルチャー観がかくも曇りのない声音で語り得るものであったというのは、ふりかえって興味深いものに思われる。実際、折から冷戦終結と政治の保守化という出来事を含んでその影響が学問的な世界にも余波を広げていたこの当時、アメリカの人文学界ではポピュラーカルチャーに対する関心がかつてなく高まり、概念と方法に関する議論が交わされ、従来見られなかったようなポピュラーカルチャーへの関心と意欲が勃然と湧き上がっていた。それはアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』(1987)が惹起した論争をはじめ、カルチュラル・スタディーズの抬頭、多文化主義論争、文化戦争、そしてニューヨーク近代美術館の展覧を契機とする「ハイ&ロー」論争……といったもろもろを背景に、文化と政治と社会が複雑に切り結ぶ今日的な状況が先取りされた時代でもあったのである。

立教大学アメリカ研究所では2011年度にポピュラーカルチャーに関する小規模な研究会を発足させたが、これを機に、日本では知られることの比較的少なかったこの当時のポピュラーカルチャー研究の状況を概観しておきたい。なお紙幅の制約もあって、本稿の議論はいわゆるサーヴェイ論文に相当するほど体系的・網羅的なものではないことを予めお断りしておく。

2

まずは研究分野の始まりをざっとふりかえっておこう。

アメリカ研究のなかの独立した一分野としてポピュラーカルチャー研究が登場したのは、1960年代後半、専門論文を発表する紀要として *Journal of Popular Culture* が創刊され、オハイオ州のボウリング・グリーン州立大学 (BGSU) にポピュラーカルチャー研究所が開設されたことを事実上の嚆矢とする。当初は専任スタッフもない組織だったが、所長をつとめた文学史家・民俗学者レイ・B・ブラウンの士気は高く、歴史家ジョージ・バンクロフトの伝記でピューリッター賞を受賞したラッセル・B・ナイ、および『アメリカン・ヒーロー——神話と現実』『アメリカン・モザイク——アメリカ文化史再考』

などの著作で一般にも知られたマーシャル・フィッシュウィックの二人と語らってポピュラーカルチャー学会（Popular Culture Association）を設立。さらに1973年には全米で初めてポピュラーカルチャー研究の修士課程、また翌年には本格的なポピュラーカルチャー学部をBGSUに創設した²。

ブラウンがこの学部創設に意欲を燃やしたのは全米の大学にあるアメリカ研究の学部や講座が70年代になってなお「エリート文化一辺倒」であることに大きな疑問を抱いたからだ——とはご本人の回顧の弁だが、そもそもこの当時は「ポピュラー」カルチャーよりも「マス」カルチャーという言い方のほうがはるかに人口に膾炙していたことなどを考えると、当時としては確かに野心的な試みであったに違いないだろう。ブラウンの学問的自伝『アカデミアにさからって』の書名がいきみじくも示すように、「古典」や「伝統」や「規範」を墨守する大学制度のなかにポピュラーカルチャー研究を持ち込むことへの学界の風当たりは生易しいものではなく、「ポピュラーカルチャー研究」で独自に学位を授与する制度の整備ともなれば、BGSUにおいてさえいまお21世紀当初の目標として掲げるのが精一杯というのが現状なのである³。

とはいえポピュラーカルチャーのいくつかの分野に限っていえば、既にこれ以前に、ある程度まで大学組織への参入が進んでいたことも事実である。

たとえば映画の場合、ハリウッド映画産業の地元に当たる南カリフォルニア大には早くも1929年に映画学校（School of Cinematic Arts）が創設されている。ここは当時人気絶頂だった映画スターのダグラス・フェアバンクスを筆頭に、映画監督のD.W.グリフィスとエルンスト・ルビッチ、脚本家ウィリアム・デミル、プロデューサーのアーヴィング・サルバーグとダリル・ザナックら赫々たる映画産業の名士大物連が実務者（主として映画の専門技術者）の養成を目的として寄付したもので、場所柄、フランク・キャブラやメアリー・ピックフォード、グレタ・ガルボらが教壇に立ったこともあるという。さらに第二次世界大戦をはさんで映画理論の体系化にまで領域を広げた結果、1958年には映画学で博士号を授与する最初の存在となっている。

同様に、商業広告についてはアメリカの流通業の拠点にあたるシカゴ周辺の大学が早くも1930年代に寄付講座で広告研究を受け容れており、いわゆ

る産学協同に前向きなアメリカの大学らしい実践的な態度を見せていた。要するに産業界との接点のあるポピュラーカルチャー——つまりは商業文化——は、既に早くから大学制度の一角に場を占めていたわけである。但し、これらの組織が正面切って「大衆文化」を対象分野として掲げていたわけではないことには注意を払っておく必要があるだろう。その意味で、既存の人文学のなかであえて「ポピュラーカルチャー研究」の旗印を掲げたブラウンとBGSUの存在は、なるほど異彩を放つものと見てよかったのである⁴。

3

1970年代以前のアメリカには、もうひとつ、論壇におけるポピュラーカルチャー論の先行例があった。マシュー・アーノルドからT. S. エリオットを経て英米各世代の知識層に受け継がれてきた、いわゆるマスカルチャー批判の系譜である。

よく知られるとおり、エリオットはノーベル文学賞を受賞した年に『文化の定義のためのおぼえがき』（1948）と題する評論を上梓し、古典主義、伝統主義、保守主義にくわえて文化のエリート主義者としての自負を高らかにしたが、この姿勢は改めて文壇に論議を呼ぶ一方、ふたつの世界大戦を経た時代環境の激変を危惧する知識人たちの間にひそかな共感を呼ぶものでもあった。

その典型が「マスカルチャーの理論」（1957）と「マスカルトとミッドカルト」（1960）の批評家ドワイト・マクドナルドだろう。通称「ニューヨーク知識人」の左翼のなかでもぬきんでて華やかな存在感を放った彼は、「ラディカル」がえてしてそうであるようなかたちでハイカルチャーを信奉し、「大衆」文化をしりぞけた。いや、正確にいうと大衆社会の「ハイカルチャーかぶれ」を排し、「マスカルチャー」のなかで「ときおりきらりと光る本物」を見分けてみせる高等遊民ふうのディレッタンティズムが、マクドナルドの真骨頂であった⁵。

今日改めて見直してみると、その議論は大衆文化批判というより上流かぶ

れの俗物趣味スノビズムに対する憎悪を秘めた揶揄がなによりの要点であって、この点ではむしろ文化資本として見たほうが面白いのだが、その筆舌のあけすけな皮肉っぽさが彼の議論を必要以上に狷介に、個人的過ぎるものに見せたことは否めない。それゆえ彼の議論はそれ以上学問的に引き継がれることはなく、その後は、彼からさかのぼるかたちで1970年代にアメリカで初めて「発見」されたアドルノとホルクハイマーのいわゆる「文化産業」論——彼らが1947年にヨーロッパで出版した『啓蒙の弁証法』は1972年に英訳された——が、左翼の教条主義的文化論として冷戦期後半を特徴づけることになったのである⁶。

とはいえ1970年代に、文化産業論がいわゆる「上からの教化」理論トリックル・ダウンを通して描くのと異なった精神風土も芽を吹き始めていたことは、これも強調されてしかるべきだろう。たとえばニューディールから1960年代の「偉大な社会」まで民主党指導部が事実上の党是としてきた「大きな政府」の方針は、南部バプテスト教会の福音派教徒という異色の大統領ジミー・カーターによって70年代に大きく自己修正された。またレイチェル・カーソンの『沈黙の春』(1962)に触発された環境運動と60年代半ばに始まったラルフ・ナイダー率いる消費者運動は、70年代には「偉大な社会」的コンセンサスを離脱していわゆるリバタリアニズムへつながる姿勢を急速に強め始めている。要するに知識人たちの議論がどうあれ、70年代のアメリカ社会は既に「下からの主導」ボトムアップによる社会的な力を露わにし、その後の多文化主義へと途を拓きつつあったのである。

このような潮流の変化は、当然、ポピュラーカルチャー研究のなかにも新しい動きとなって表れた。たとえばハーバート・ガンズの『ポピュラーカルチャーとハイカルチャー』(1974)やアーヴィング・ゴフマンの『ジェンダー広告論』(1979)、またヘイドン・ホワイトの論文「構造主義とポピュラーカルチャー」(1974)などは、第二次世界大戦後に徹底化された「マス」コミュニケーション技術がきわめて強い浸透力を発揮しているだけでなく、それを受容する人々の主観世界で何が起こってきたのかに対する理解を抜きにしては語り得ないものだった。また1960年代に古典文学から庶民的な俗謡や商業映画にまでわたる文学批評の可能性を切り拓いたレズリー・フィード

ラーは70年代にはTVのトークショーや低予算映画にも出演するちょっとした——いまふうにいえば——メディア・セレブの横顔を見せるようになっていた。彼らは、先行する知識層が「マスカルチャー」と呼んだものを同時代的にくぐり抜けることを通して、よかれあしかれ先の世代とは異なったポピュラーカルチャーをめぐる視野を身に着けていたのである⁷。

4

こうした70年代における変化を思えば、1980年代が急速にポピュラーカルチャーを含む文化研究の画期としての様相を強めることになったのはけだし当然というべきだろうか。

実際70年代末からの10年間は、ポピュラーカルチャーの公的な地位が変化すると同時に、今日的な文化の研究が人文・社会諸分野の目を大きく惹きつけた時代だった。たとえば合衆国建国200周年祭に世間が湧いた1977年は、アメリカの「伝統」を見直すべくデルタ・ブルーズやケイジャン、クリオールといった古い黒人音楽の遺産への再評価が加速される一方、学界ではローレンス・レヴィーンの『黒人文化と黒人意識』、アン・ダグラスの『アメリカ文化の女性化』、モリス・ディクスタインの『エデンの門』、そしてレイ・ブラウンとマーシャル・フィッシュウィックが編者となった論集『アメリカのアイコン』がくつわをそろえる注目すべき年となった。また数年後の1981年にはいまやアメリカ文化史の古典となったジャクソン・リアーズの『恩寵の場でなく』(最近『近代への反逆』として邦訳された)が上梓された⁸。

さらにそれから10年後になると、ロバート・ライデルの『あまねき世界の博覧会』(1987)、レヴィーンの『ハイブラウ／ロウブラウ』(1988)、ニール・ハリスの『文化の散策』(1990)、ウィリアム・テイラーの『タイムズ・スクウェアの誕生』(1991)と『ゴッサム探究』(1992)、ミリアム・ハンセンの『バベルとバビロン』(1991)、ジョージ・リプシッツの『真夜中の虹』(1994)、リアーズの『豊かさの寓話』(1995)、ダグラスの『怖るべき正直さ』(1995)等々が、それぞれ芸能、演劇、音楽、広告、映画、産業デザイ

ン、都市空間、雑誌、万国博、大衆美術などを題材にとりあげながら、ポピュラーカルチャーを通して歴史に向かう新しい実践や理論的アプローチへの意欲を示すことになる⁹。これらの面々の多くは当時としても大家に数えられるような顔ぶれであり、それだけでも80年代の若手や新進が彼らの後を追ってこの分野に急増しつつあることを端的に示唆していたのである。

1988年、マイケル・デニングはパリで開かれた国際コロキウム「労働者階級とマスカルチャー」で「マスカルチャーの終わり」と題する発表をおこない、なぜ80年代のアメリカで文化史への関心が急増したのか、その背景にイギリスの文学理論（特にフレデリック・ジェイムソン）と社会科学（スチュアート・ホール）双方からの「文化」への接近がアメリカの学界でも受容されたことを指摘したうえで、具体的な理由を考察した¹⁰。

それによると第一の要因は、英米双方において新自由主義を標榜するサッチャー、レーガン政権が相次いで登場したことにある。とりわけアメリカでは就任当初から知識層が軽視したレーガンが、実際にはハリウッドの一芸能人の域を超える「偉大なコミュニケーター」の力を発揮したことで、リベラル・アカデミズムを「大いに当惑」させたという。レーガンは就任からまもない時期に見舞われた暗殺未遂事件を軽々と乗り越えてみせたことで支持率が急上昇し、以後は政権の政策がいかに批判的となっても大統領自身への支持はいっこうに下落しないという「テフロン政治家」の異名をほしいままにした。その物腰には終始50年代ふうの古臭く垢抜けない風がつきまどったが、それがかえって余裕綽々たる落ち着いた父性を感じさせるという不思議な個性の持ち主でもあった。それゆえ彼の存在は左派の言論人たちを大いに苛立たせ、ゲリー・ウィリスに『レーガンのアメリカ』（1986）を、マイケル・ローギンに『ロナルド・レーガン、ザ・ムーヴィー』（1987）を書かせる動機ともなった。ことにカリフォルニア大バークレー校きっての左翼の政治学者として知られるローギンはレーガンの大衆教唆術を「政治的悪魔学^{デーモノロジー}」と呼んで唾棄したが、それはむしろレーガン流政治がいかに手ごわく批判しがたいものかを如実に示していたのである¹¹。

さらにデニングは第二の要因として、70年代に一気に伸長したエリート・フェミニズムが80年代にポピュラーカルチャーへの姿勢を大きく転換させ

たことを挙げる。ジェンダー研究や女性史を含むフェミニスト研究は、たとえば史学においてはナンシー・コットの『女性の絆』(1977)などによって大きく地平を広げたが、他方では「学問的アヴァンギャルド」ならではの戦闘性で「マスカルチャーに対する高飛車な敵意」をも隠さなかった。しかし80年代にはより多元化した黒人女性史や労働者階級女性史からの批判的検討によって修正を迫られ、かつては軽侮した大衆小説やハリウッドのメロドラマ、美人コンテスト、化粧品の広告類……といったもろもろへと向き合うよう迫られることになる。それはフェミニスト文化研究が伝統的に高等教育へと子女を送り出してきた中流層の道徳的・自己節制的女性観を離脱し、「女を売り物にする」商品文化のなかに新たな議論の可能性を見出すほうへと大きくシフトしたことを意味したのである。

そしてデニングは第三の要因として、1980年代に大きな関心の的となったポストモダニズムの抬頭を挙げる。

ポストモダニズムは、それ自体は厳密な概念というよりほとんど定義しがたい文化現象とでもいうべき様相を呈したが、この当時の文壇・論壇を含む知的世界の実相に即していえば、いわゆる「ラスヴェガスから学ぶこと」——卑俗で安っぽい大衆の商品文化の実践を新たな視点で再評価すること——を意味した。ちなみに「ラスヴェガスから——」は、かつて建築家ロバート・ヴェンチュリがイェールの大学院ゼミで使用した短い論文の題名で、「まともな」建築家なら洩も引っかけないような「醜悪で凡庸な」(ugly and ordinary) ロードサイド風物のなかにも建築のアカデミズムが学ぶべきものがあることを説いた実験的な試みである。この議論を通してアメリカの現代建築理論は、かつてアメリカ研究が説いた「ヴァナキュラー」概念を現代的な商品文化の中に移植する方法を発見し、この成果が逆に、当時専門分野を越えて大きな影響力を発揮した文化人類学に還流されるかたちとなって一気に広まったのである¹²。

5

こうしてデニングの描いた見取り図をふりかえってみると、多文化主義と

文化戦争が到来する直前の時期の学界と論壇における中心的な課題が、図らずも今日の文化研究にとって重要なことを示唆しているのがわかる。

多文化主義はその性質上、社会集団ごとに異なった「文化」が複数存在することを自明視する傾向にあり、それゆえ、「文化の優劣」を弁別する歴史的・伝統的な文化制度の力を看過ないし軽視しがちになる。しかし「ポピュラー」カルチャーの研究にとって、ある文化制度のなかで何が「ポピュラー」であり何がそうでないと言われるのかを問うことは、単なる好事家的興味を越えた意味を持つ。デニングがいうように「ポピュラーカルチャー研究は……より大きな文化の研究の一部とならなければならない」のである¹³。

この点で注目し値するのが、1991年のアメリカ史学会（AHA）でのシンポジウムの席上、ローレンス・レヴィーンとジャクソン・リアーズのあいだで交わされたやりとりだろう¹⁴。

レヴィーンは今日『ハイブラウ／ロウブラウ』の著者としてもっばら知られているが、もとはニューヨークの下町生まれらしい都会っ子のセンスで黒人史——特に文化史と芸能史——の新しい局面を開いた白人研究者として活躍した時期が長かった。その後、『ハイブラウ——』の成功とマッカーサー賞の受賞を機に、近現代のアメリカ文化全体を広く見渡す批評家としての仕事に新局面を発揮したが、わけても精力を注いだのがアラン・ブルームの『アメリカン・マインドの終焉』に対して、ポピュラーカルチャーを含むアメリカ文化の伝統と独自性を強調する論考の数々だった。

そのひとつが、シンポジウムで発表された「産業社会のフォークロア」と題する有名なエッセイである。このなかで彼はアメリカの大衆文化がしばしば極度に商業化された、安っぽい大量生産品的なもの以上ではないとする文化産業論的な批判の数々に対して、確かにそうした批判が当てはまる現実があることを認めながら「マスカルチャーと呼ばれているものが必ずしもポピュラーなわけではない」という。

大量生産された本の多くは大多数の人々には読まれず、映画は見られず、ラジオは聞かれない。（略）これが意味することは明白だ。すなわち選ぶ側の主体性、である。ポピュラーカルチャーのどんなジャンルでも、見る側はちゃんと、上質で魅力

があって使えるものとそうでないものを見分けているのである¹⁵。

たとえ大量生産されたものであれ、人々の選択で生き残ったものには必ず理由があり、ゆえに何らかの個性があるはずだというこの論理が、たとえば1970年代にリチャード・ホガートやイヴァン・イリイチらが説いた民衆史観的な見方とは微妙に異なるものであることに注目しておこう。ホガートは支配的エリート層の文化とは生活世界を異にする非支配層の拠点としての民衆文化という構図を掲げ、これを毒するものとしてアメリカ流の物質文化——彼はそれを「ジュークボックス・ボーイズを夢中にさせるもの」と呼ぶ——を唾棄するのだが、レヴィーンの見方ではジュークボックスの前の若者のほうにこそ、自律的な文化的主導権があることになる。

ちなみにこうした見方の背景には、1960年代の文学批評やコミュニケーション理論と社会学の分野で急速に興隆したいわゆる「受容理論」の影響を見ることができるが、レヴィーンの場合、これを「選択的消費」の観点を紹介してアメリカの商業文化の再評価に結びつけたところに彼らしい楽観的な独創性があった。その端的な反映が、「選ぶ側の主体性」をめぐるあの論理なのだ。

現に彼はポピュラーカルチャーを語る際に大事なのは単純で実際的な定義から始めることだとして、「ポピュラーカルチャーとはポピュラーなカルチャーのことだ」という。むろん、しゃれである。

要するにポピュラーカルチャーとは、広く人気のある文化のことなのである。広く親しまれやすく、現に親しまれているもの。広く見られ、聞かれ、読まれているもの。(略) こういう人目を惹く文化は、しばしばマスカルチャーと呼ばれているものとも重なっている。

(しかし) 人々は、ポピュラーカルチャーが提供するものを何でも一方的に受け容れているわけではない。(略) たとえば1934年当時のニューヨークの少年少女にとって、好きなラジオ番組を選ぶときの一番の秘訣は他の悪童たち——つまり世代の好みにかけては最も信頼のおける仲間集団——に訊ねることであり、ラジオのつまみを適当に回してあちこちの局を探したり、番組の宣伝を当てにしたり、いわん

や両親の勧めに耳を傾けることなどよりもずっと有用なのであった¹⁶。

6

今日の私たちにとって、レヴィーの立論はおそらくふたつの意味を持っている。

ひとつはこの明快で闊達な口調が、“people”という単語が単なる被支配者集団としての「庶民」や「大衆」ではなく、社会を等しく生きる「あらゆる人々」を含意したアメリカンな感覚を色濃く反映していることである。そこにはベンジャミン・フランクリン流の理神論の明らかな残響があり、かつて興隆期のアメリカ研究がしばしばアメリカ文化の特質として理想的に説こうとした大らかなで平俗な「アメリカニズム」のイメージがある。

しかしながら他方、「消費者の主体性」を強調するこの議論には、ネオリベラリズムの経済理論が説く自由放任の「市場原理」主義の論理に通ずるものもある。すなわち、高度に産業化・資本化された社会のなかで「消費者」として位置づけられた人々は、それでもなお彼らの「選択」を通して資本が提供する多様な商品を前に「主体性」を発揮し、その総体において資本に先ずる市場の主導権を掌握し得るのだ、という楽観論である。

さて、先のシンポジウムの席上、この楽観論をめぐる疑問を投げかけたのが、若手の黒人史家ロビン・ケリーやフランス社会史のナタリー・デイヴィスと並んでコメントに立ったリアーズだった。彼はその冒頭で、既に1980年代の社会史や文化を通して受容理論やミハイル・バフチンの対話とポリフォニーの思想が広く行き渡った今日、消費者大衆の主体性に信を置くレヴィーの議論を批判するのは困難だとしながらも、その「ホイットマン的な」楽観論の問題点を三つ指摘した¹⁷。

第一に、レヴィーは「(市場という)統合のもとでの多様性」を説いているが、それは1930-40年代に「アメリカ的生活様式」を積極的に売り込んだ「文化的ナショナリスト」の議論と同形だ、という指摘である。30年代の大不況は先行する「ジャズ・エイジ」の浮薄なコスモポリタニズムに対する反感も手伝って「アメリカ」の伝統を礼賛する機運にあふれる一方、デフ

レ不況を打破しようとする国家的努力は「消費」を奨励し、よりよい消費者がよりよいアメリカ人であるという「マーケットターの論理」を正当化する途を拓いた。この見方はかつて故ウォレン・サスマンが論証したもののだが、レヴィーンの議論はこの30年代的なコンセンサスをそのまま引き継いでいるだけでなく、レヴィーン自身の子ども時代のノスタルジックな「ラジオ・デイズ」の逸話を加味することで「主体的な消費者」像を神話化することになってしまっているのである¹⁸。

第二は、レヴィーンの議論が「産業社会のフォークロア」を名乗ることによって、産業化以前と以後の歴史の根本的な相違を曖昧にしていることである。レヴィーンは奴隷制時代の黒人フォークロアの研究で知られるが、ここでは過去の民俗的叡智の構図をそのまま現代の消費生活に応用可能なものと見立てることによって、いわゆるゲゼルシャフトからゲマインシャフトへの移行過程で生じた問題を無化してしまう。しかし実際には産業化時代の資本＝商品世界の演出者たちもまた消費者に先んじる知恵を働かせている。実際、商品市場において消費者が自身の選択として感じるものはたいがいマーケティングの成果であり、広告産業がそれをデモクラシー（消費者自身の自発的営為）として売り込んでいるに過ぎない。その点を看過したレヴィーンの議論は単なる機能主義の論理になっているということである。

第三は、リアーズ自身のレヴィーンの世代との差異の問題である。あるいは、研究者の個人的な来歴が研究対象としてのポピュラーカルチャーを見る目に与える影響の違いである。

それによると大不況期の初めに大都会の下町っ子に生まれたユダヤ系のレヴィーンと違って、第二次大戦後の世代であるリアーズは「つねに境界のところにいるという意識」に包まれていたという。たとえば両親はそれぞれアングロ＝サクソン系のカソリックとプロテスタントだったし、生まれたのは北部と南部の境界州のひとつであるメリーランドで、ことに母には南部人としての自覚が強かった。しかしながら、と彼はつづける、こうした感覚は「ロス・ペロー以上のはみ出し者意識というわけではなく」、つまりは戦後の多くのアメリカ人に共通する思いでもあった、と（このへんの癖のあるユーモアがいかにもリアーズらしい）。現にゲイリー・クーパーやジェイムズ・

ディーンが演じたのは周囲との不和をかこつ孤独なヒーローが古風な倫理のもとに封じ込められている悲劇的な姿であったが、実はそうした姿が大衆的な娯楽物語の記号となっていた時点で、既に「封じ込めは破れていた」。それゆえ 1960 年代から 70 年代の新しいポピュラーカルチャーは、資本の演出者たちが差し出すものを笑いのめし、茶化して換骨奪胎するほうへと傾斜した。つまりその時点で受容者としての消費者は「選択する主体」ではなく「抵抗する主体」となり、ポピュラーカルチャーは現在にまでつづく「文化的な権力闘争」(cultural power conflict) の場へと変貌したのだ——とリアーズはいうのである。

よく知られる通りリアーズは現代のアメリカ研究の世界で最左翼に位置する存在と目されているが、ここに見られる論理は左翼というよりむしろ、現代の若いサブカルチャー研究の世代のコンセンサスを先取りしている観がある。彼のコメントが「ポピュラーカルチャーを嗤う」(Making Fun of Popular Culture) と題されているのは、ポピュラーカルチャーが単に甘く愉しく消費する娯楽物というだけでなく、より攻撃的・侵犯的な一面を持っていることを看過していないからだ。いいかえればリアーズは「消費者」として同定される人々を単なる「選択の主体」ではなく、商品の演出者たちの意図やもくろみを茶化し、戯画化し、笑いのめす破壊的な創造者——のあくまで可能性を秘めた存在——と捉えようとしており、そこに受容理論の限界を超える契機を見出しているのである¹⁹。

7

AHA のシンポジウムでレヴィーのポピュラーカルチャー観に疑問符をつけたリアーズは、コメントの最後に新しい実践例として、当時出版されたばかりだった映画史家ミリアム・ハンセンの『バベルとバビロン』を紹介している。ハンセンは 2011 年に惜しくも病没してしまったが、1970 年代にマーティン・ラセットやエリザベス・ユーウェンらが切り拓いた映画草創期の映画館における移民観客の研究蓄積にユルゲン・ハバーマスの公共圏論を架橋し、映画と移民と新しい社会の創造が重層的に織りなす初期映画の時代

の混成的可能性をダイナミックに論じて、チャールズ・マッサーらとともに1980年代の映画の社会史に大きな躍進をもたらした研究者である。こうした映画史の展開に刺激されるかたちで女性史・社会史の分野でもキャシー・パイスの『チープ・アミューズメント』などが登場したことを考えると、1980年代はポピュラーカルチャー研究と社会史が本格的に手をたずさえるようになった時代でもあったということができるだろう²⁰。

さて、本稿もそろそろ紙幅が尽きた。その後のポピュラーカルチャー研究はそれぞれの個別分野の進展とともに次第に分散化し、ちょうど社会史がそうであるように全体像を見失う傾向を嘆かれるようになってゆくのだが、そのあたりについては機会を得て稿を改めることとしたい。但し最後にひとつ、1990年代以降の新しい傾向を表わす一例としてジョージ・チョーンシー『ゲイ・ニューヨーク』（1995）に触れておこう。

チョーンシーは日本では『同性婚』（明石書店、2006）が邦訳されているだけだが、最初の主著となった『ゲイ・ニューヨーク』は世紀転換期における大都市ニューヨークのエリート男性知識層をめぐるジェンダー／セクシュアリティの社会史というだけでなく、ポピュラーカルチャーを含む都市の文化史がインテレクチュアル・ヒストリーと通ずる一面を持つことを明確に示した点でも注目された。この時期のアメリカ史学の動向を素描したエリック・フォナー編『ニュー・アメリカン・ヒストリー』（1997）で思想史の章を担当したトマス・ベンダーが示唆したように、文化史と思想史はどちらも社会における文化のヒエラルキーへの関心を分かち合い、排除／包摂の仕組みに注意を払う点で共通する間柄をなしてきたのである²¹。

註

¹ 本間長世『アメリカ文化のヒーローたち』（新潮選書、1991年）9頁。

² Leslie Wilson ed., *Americana: Readings in Popular Culture* (Hollywood: Press Americana, 2010).

³ Ray B. Browne, *Against Academia: The History of the Popular Culture Association / American Culture*

Association & the Popular Culture Movement, 1967-1988 (Bowling Green, Ohio: Bowling Green State University Press, 1989); Leslie Wilson, *14 Conversations with Scholars of American Popular Culture* (Hollywood, CA: Press Americana, 2006), pp. 44-45.

⁴ Barry Salt, "A Brief History of Cinematography," *Sight and Sound*, (April 2009); 堀田一善『マーケティング思想史の中の広告研究』（日経広告研究所, 2003年）。

⁵ 有賀夏紀, 能登路雅子編『史料で読むアメリカ文化史4——アメリカの世紀 1920年代—1950年代』第IV部第5章「知識人の大衆文化批判——ドワイト・マクドナルド『マスカルトとミッドカルト』」（東京大学出版会, 2005年）。

⁶ Max Horkheimer and Theodor W. Adorno, *Dialectic of Enlightenment*, translated by John Cumming (New York: Seabury Press, 1972).

⁷ Herbert Gans, *Popular Culture and High Culture: An Analysis and Evaluation of Taste* (New York: Basic Books, 1974); Erving Goffman, *Gender Advertisements* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1979); Hayden White, "Structuralism and Popular Culture" *Journal of Popular Culture* vol. 7, no. 4 (spring, 1974), pp. 759-775.

⁸ Lawrence Levine, *Black Culture and Black Consciousness: Afro-American Folk Thought from Slavery to Freedom* (New York: Oxford University Press, 1977); Ann Douglas, *The Feminization of American Culture* (New York: Farrar, Straus, and Giroux, 1977); Morris Dickstein, *Gates of Eden: American Culture in the Sixties* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1977); Ray B. Browne & Marshall Fishwick eds., *Icons of America* (Bowling Green, Ohio: Popular Press, 1977); T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920* (New York: Pantheon, 1981).

⁹ Robert Rydell, *All the World's a Fair: Visions of Empire at American International Expositions, 1876-1916* (Chicago: University of Chicago Press, 1987); Lawrence W. Levine, *Highbrow, Lowbrow: The Emergence of Cultural Hierarchy in America* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1988); Neil Harris, *Cultural Excursions: Marketing Appetites and Cultural Tastes in Modern America* (Chicago: University of Chicago Press, 1990); William R. Taylor, *Inventing Times Square: Commerce and Culture at the Crossroads of the World* (New York: Russell Sage, 1991); William R. Taylor, *In Pursuit of Gotham: Culture and Commerce in New York* (New York: Oxford University Press, 1992); Miriam Hansen, *Babel and Babylon: Spectatorship in American Silent Film* (Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1991); George Lipsitz, *Rainbow at Midnight: Labor and Culture in the 1940s* (Urbana: University of Illinois Press, 1994); T. J. Jackson Lears, *Fables of Abundance: A Cultural History of Advertising in America* (New York: Basic Books, 1995); Ann Douglas, *Terrible Honesty: Mongrel Manhattan in the 1920s* (New York: Noonday Press, 1995).

¹⁰ Michael Denning, "The End of Mass Culture," *International Labor and Working-Class History*, no. 37 (spring, 1990), pp. 4-18.

¹¹ Garry Willis, *Reagan's America: Innocents At Home* (New York: Doubleday, 1986); Michael Rogin, *Ronald Reagan, the Movie: and Other Episodes in Political Demonology* (Berkeley: University of California Press, 1987).

12. ロバート・ヴェンチュエリ『ラスベガス』（鹿島出版会、1978年）。
13. Denning, "The End of Mass Culture," p. 17.
14. このときのシンポジウムの記録は以下の「AHR フォーラム」に収録されている。*The American Historical Review*, vol. 97, no. 5 (Dec., 1992).
15. Lawrence W. Levine, "The Folklore of Industrial Society: Popular Culture and Its Audiences," in his *The Unpredictable Past: Explorations in American Cultural History* (New York: Oxford University Press, 1993), p. 296.
16. *Ibid.*, pp. 295, 303.
17. T. J. Jackson Lears, "Making Fun of Popular Culture," *The American Historical Review*, vol. 97, no. 5 (Dec., 1992), pp. 1417-1426.
18. Warren Susman, *Culture as History: The Transformation of American Society in the Twentieth Century* (New York: Pantheon Books, 1984).
19. Lears, "Making Fun of Popular Culture," pp. 1423-25.
20. Russell Merritt, "Nickelodeon Theaters, 1905-1914: Building an Audience for the Movies," Tino Balio ed., *The American Film Industry* (Madison: University of Wisconsin Press, 1985), pp. 83-102; Elizabeth Ewen, *Immigrant Women in the Land of Dollars: Life and Culture on the Lower East Side, 1890-1925* (New York: Monthly Review Press, 1985); Kathy Peiss, *Cheap Amusements: Working Women and Leisure in Turn-of-the-Century New York* (Philadelphia: Temple University Press, 1986).
21. George Chauncey, *Gay New York: Gender, Urban Culture, and the Making of the Gay Male World, 1890-1940* (New York: Basic Books, 1995); Thomas Bender, "Intellectual and Cultural History," in Eric Foner, ed., *The New American History* (Philadelphia: Temple University Press, 1997).